

年に一時的な賜暇帰国を果たし、そのまま、シャム（タイ）の総領事（後に公使）を命ぜられ、この地に赴任しました。さらに引き続いて、モンテヴィデオ（ウルグアイ）やモロッコの公使を務めることとなります。

■イギリスの日本駐日全権公使として

同じ頃、東アジアでは日清戦争が終結し、イギリス外務省は国益上、この地域の行方を重視していました。特に講和会議で日本への割譲が決まった遼東半島を清へ還付させようとするロシアとフランス、ドイツの動きである所謂、三国干渉のなり行きを注視しなければなりません。その意味で、東北アジアを熟知したサトウが必要だったのです。このようなことから、サトウは1895（明治二十八）年7月にかつての任地日本へ第6代目の英国全権公使として着任します。

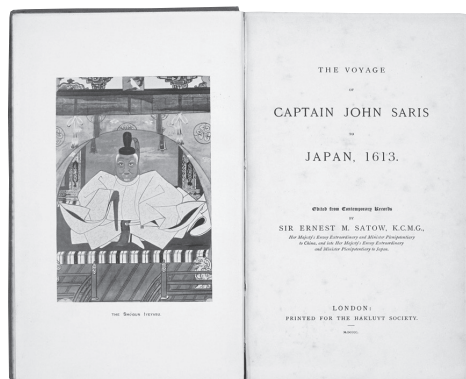
サトウにとって、公使としての日本駐節はこれまでの通訳官や書記官としての滞在とは違い、全権としてイギリスを代表する立場にあります。また、彼は前任者までとは異なり、自分の経歴からして既に知日派の域にあるとの自覚もあったのではないのでしょうか。このため、日英両国が歴史的に交流を始めた発端を明らかにすべきであると感じていたと考えられます。そのためにも、1613（慶長十八）年にイギリス国王の特使として来日していたジョン・セーリスの来日記録を紐解く必要性があったのです。

同時に、サトウは1600（慶長五）年にウィリアム・アダムス（三浦按針）が、オランダ船で豊後に漂着していた記憶を人々から呼び起こす必要がありました。アダムスは徳川家康から外交顧問的な職務を与えられて日本に滞在し、イギリスとの通商関係の必要性を助言していたことも、セーリスにからめて明確にしておくべき

であると考えたとしても不思議ではありません。

■『セーリスの日本渡航記』の編集

これを実現するため、ジョン・セーリスの来日記録の写本をロンドンにあるイギリス政府インド事務省（連邦省）で入手し、それを底本にして編集することに決めたようです。



“The voyage of Captain John Saris to Japan 1613” London, 1900.（本学図書館所蔵）
前扉の絵には“*The Shōgun Iyeyasu*”（徳川家康）と記載されている。

このセーリスとは、イギリス東インド会社の対日貿易の計画に基づいて東洋へ派遣された船隊司令官でした。1611（慶長十六）年にイギリスのダウズを出港して、ジャワ島のバンタムに到着し、前述のアダムスの情報に基づいて1613（慶長十八）年6月に長崎から平戸へ入港しました。その後、アダムスの案内により駿府で徳川家康に、また江戸で徳川秀忠に拝謁してジェイムズ1世の国書を呈しています。これによってイギリスとの通商貿易が始まり、平戸に商館が作られ、セーリスは商館長のリチャード・コックスと約10名の商館員を残して日本を離れました。⁽¹⁾

セーリスはこの航海と渡航の記録を日記形式の記録に纏めていましたが、サトウはこの内、